

増毛山道を歩む その1。

増毛山道とは、北海道西海岸に沿って走る国道231号の浜益郡幌と増毛郡別荘の境にある雄冬山塊の約1000Mの峰々を越える全長約21・5Kの、既に廃道となってしまった山道である。

この山道の事について色々調べ「失われた道を求めて」と題する雑文を書いたが、どうしてもこの山道を歩いてみたくなり、浜益山岳会の人達と別荘側から第一回目の調査のため入る事となった。

安政2-4年(1855-57)にかけて、我家の先祖三代目伊達林右衛門が私費を投じて開さくしたこの山道が一世紀以上を経たのち、当時は旅人の往来もあり、昭和の始め頃までは利用価値の有ったであろうこの山道の、時代の変遷と共にその姿を変え、現在では全く自然の姿に戻ってしまった道の痕跡を捜し求める旅である。

平成5年4月25日、北国の遅い春に追討ちをかけるような台風並に発達した低気圧が接近してくる、との天気予報があたり、札幌を出発した朝は薄暗くどんよりとした小雨まじりの天気で、石狩川も上流の雪解けの増水で赤茶色の濁流が渦を巻いて石狩湾に注いでいる。厚田の付近の小高い丘からこれから向かう雄冬山塊はその姿も見えず、日本海特有の暗い海には強風で白い波頭が無数に立っており、ミゾレ混じりの強い横風で車のハンドルが持って行かれそうになる。9時45分、浜益山岳会の事務局になっている渡辺千秋氏宅に到着すると、すでに同山岳会々長の武田秀秋氏を始め、山口一弘氏、上田治之氏等が集まっていた。私を含めて一行5名、山口氏の車で別荘へ向かう。

10時22分別荘に到着。懐かしい伊達の元別荘ニシン番屋の横に、去年の秋には無かったが真新しい白い棒杭が立っていて「旧増毛山道入口」裏面には「寛成八年浜益増毛両場所請負人三代目伊達林右衛門の手によって自費をもって開かれた道である」と記され、「平成4年増毛町教育委員会」とある。

「寛成八年浜益増毛両場所請負人三代目伊達林右衛門云々」があるが、この山道が完成したのはその61年後の安政4年である。寛成八年(1796)は初代伊達林右衛門が増毛場所を請負った年である。

さてその棒杭の立っている国道231号から約50M程アスファルトの道を山側に上がると、もう一面の笹に覆われた雑木林である。山道と思しき地点を捜して10Mほど登ると有ッタ・有ッタ、微かに道形らしい細い踏跡が僅かにあり、おまけに山道の入口であったことを示すであろう石の庚申塚があり、裏面に「明治三十二年十一月十二日(文字不明)詰方創立」とあり、そばに朽ち果てて崩れてしまった社らしい木片が散乱し根曲竹に覆われていた。それにしても猛烈なヤブである。この時期を選んだのは多分にヤブコギを避

ける期待も有ったのだが・・・。

20分程登ると、突然円形の赤いほうろう板製に白字で3ナンバーの板が立木に打込まれていた。思うにこの山道が登山道として利用されていた時代の名残であろうか。

地形的にはゆるやかなナマコ状の尾根を道は真直ぐ登っている。悪戦苦闘のヤブ漕ぎを約一時間ほど続けると151・2Mの三角点があり赤と白の斑の測量ポールが現われた。この尾根の所々に雑木を切った痕跡があるところを見ると、地元の人が時々入るらしい。所々残雪の有るところはヤブ漕ぎの苦労から逃れられるが、そんな都合の良い所ばかりあるわけではない。ほんの3M前を行く人の姿を見失は無いようするが精一杯である。

そのうち次第に風と雪が強くなり、ヤブの中にいるとさほど感じないが振返って見る別荘の海は吹雪のカーテンに覆われている。

12時42分、やや開けた雪原の所で尾根を横切っている林道に出た。風のあまり強くない所で昼食にする。高度計によると250M地点である。

会長の武田氏がてぎわよく枯木を集め雪上で焚火を始めた。濡れた衣服を干しながらこの山道を開拓した人達の苦労に思いを馳せていた。

晴れていれば付近の暑寒別岳や雄冬岳が見え、下界には増毛、留萌、利尻富士まで見えるはずなのだが・・・。

雪原の上では道形らしいものは見えないが、所々に例の赤いナンバーが現われるので大体の道順は辿っているようである。若い渡辺氏が、たしかこの上の方に電信柱があるはずだ、と言うので再び緩やかな尾根の上を約10CM積もった新雪の上を歩き始めた。強烈なヤブ漕ぎが終わり楽な雪上のワンデリングが始まる、と思ったがしかし時刻も14時を過ぎ、風雪も次第に強くなってきたのでこの地点から引返すこととした。約300Mの地点である。

下りはヤブ漕ぎを避けて林道を降り、エンルコマナイ川に沿って降りることにした。

エンルコマナイ川に沿ってぶらぶらと歩きながら、久し振りの山歩きをしたときに多くの人が感じる、なんともいえない充実感と気怠さに身を任せながら、すっかりお世話になった浜益山岳会の人達と、まだちょっと早い山菜を摘みながら別荘へ帰った。

この山道の調査は今後3回ほどに分けて行なう予定であり、次回は5月15・16日頃を予定し、今度は浜益側の入口である幌から入って見る積りである。

平成5年4月29日。緑の日に記す。

伊達 東

追記

蝦夷地の探検で有名な松浦武四郎が安政4年6月4日この地を訪れ、この山道の検分に出掛けた記録がある。「丁巳東西蝦夷山川地理取調」の「天之穗日誌」に、「余は今日新道切開口迄見置度由願候処、早々仰付被候に付、土人惣小使トンケと同道にて見物に出立しけるなり。是より凡二里程計ホンナイ（別荘のアイヌ地名）番屋前迄行。此川橋有。こへて右の山端、新道、上り懸るに巾凡二間より三間、広き処にては四間位にも切払有りしが、始め五六町の間は九折り少し峻かりしが、凡七八丁目より山の峯まま上るに、樹木立原笹を切有て、その見立方至て宣敷が故に、さして難所とする処もなし。」と記されている。

増毛山道を歩む その2

平成5年5月15日（土）、久し振りに大陸の高気圧に北海道がお、われ始め、天候が安定の兆しが現われたので、今度は増毛山道の別荘側とは反対の浜益側の入口付近の調査のため、幌の渡辺氏宅を訪れた。

この山道の幌側の入口は、幌稻荷神社鳥居の直ぐ右から裏山を真直ぐ緩やかに登りはじめ、通称大阪山と呼ばれている533・3米のピークを越えて浜益御殿山1038・6米に達している。

麓はようやく若葉が芽をふき始め山桜がポツン、ポツンと点在し、ウグイスが鳴きまことにのどかであるが、ここも別荘側と同じく道形らしきものは微かにあるが、全く熊藪に覆われヤブコギの連続である。

大阪山の遥か手前でギブアップし引返す事とした。

この付近一帯は緩やかな尾根になっていて開墾地があるため、いたるところに林道がこの増毛山道に絡まるようにかなり上部まで続いている。

一度幌まで下り、渡辺氏の車でこの林道を残雪の残る約400米の地点まで上がった。そこから小一時間程笹藪の上に残る雪田を伝わり大阪山の円形の頂きまで登る。道形は全く見えないが、山道があったと思われる見通しの良い浜益御殿山へのルートを確認できた。浜益岳1257・7米のピークはまだ十分な残雪に覆われ、広大なカール状の雪渓は春スキーのゲレンデには絶好の場所であろう。来年にはもうすこし早い時期にスキーで浜益御殿山まで登りたい、などと思いながら麓でタランボの芽を摘み、春霞が漂う幌の海辺へ下った。

5月18日記す。

増毛山道を歩む その3

前日の幌側の増毛山道の調査を終え、翌日（5月16日、日曜）再び山道調査のため幌へ来た。

今回は札幌の山岳団体北稜クラブの五十嵐勇氏が同行されることとなり、同氏の車に同乗させていただき9時に幌の渡辺氏宅に集合した。五十嵐氏とは私が「失われた道を求めて」の雑文を書いた際に種々資料を御提供していただいた関係があり、電話では何度かお話ししたことはあったものの、実は今回が初対面という誠にお恥ずかしい次第であったにもかかわらず、直ぐに打解けて楽しい山行をさせていただいた。

五十嵐氏は雨龍町のご出身でとくにこの雄冬山塊には愛着がおありとか、また20年程前の4月に別荘からこの山道をスキーを持って歩かれた経験があり、その際も藪漕ぎに苦労されたお話を伺った。

今回の調査には浜益山岳会の渡辺氏、第一回の調査にも同行された同会の上田氏、今回初参加の五十嵐氏と私の一行4名である。今回の予定は第一回の時に到達した別荘側の約300米地点までエンルコマナイ川に添った林道を登り、出来れば武好駅跡付近まで登る予定である。

天気はこのうえもなく上々で、爽やかな五月の山旅となった。前回藪漕ぎで苦労した尾根を左に見ながら、三週間前には新雪の積もっていた林道は、もうフキ等の春の若草が大きくなって北国の春の早さが感じさせられる。

前回の到達地点と思しきところで再び増毛山道に出会った。雪上のワンデリングを楽しんだ所はもう雪が消え、一面の藪原で再び猛烈なヤブコギが始まった。高度400米程の地点でようやく雪原に出て森林地帯に入った。先を歩いていた渡辺氏が電信柱の切株を見た。雪の上に約1メートルほど頭を出して切られて、相当古くなっていてぼろぼろになっている。切り株の上に小さなトド松の幼木が芽をついているものもある。さらに登ると約100メートルの間隔でほぼ電信柱の原型を止どめているものや、朽ち果てて電線が白樺の木に引掛かっているものもある。

この山道には「失われた道を求めて」でも触れたように、雄冬までかっては電灯線が敷設されており、遞送人がこの電信柱を目印として冬は行き来していたという名残であろうか。

例の円形の赤いナンバープレイトが白樺のこぶにめり込んでいる風景はいかにも年代の古さを感じさせる。広い尾根が次第に細くなり東側に巣冬期には巨大な雪庇が出ていたともわれる地点、631・9メートルの眺望は素晴らしい。眼下の暑寒別川を隔てて増毛の町から緩やかな丘陵が次第に高みをまして暑寒別岳（1491・4）に達し、さらに南暑寒岳（1296・3）群別岳（1376・3）浜益岳（1257・7）浜益御殿岳（1038・6）まで眺望出来た。この付近の山道は雪の下で見えないが立木の切り通しで判然しており例の電信柱が時々現われる。683メートルのピーカを下りやや平坦な広い白樺の巨木や

エゾ松に囲まれたちょっと開けた場所に出た。高度で約620米の地点である。ここが武好駅跡のあつた所と思われる。正面に天狗岳(938・5)が見えるが天狗とは名ばかりの円形の山である。多分南東側から見て付けた名前であろうか。

増毛山道はここからこの天狗岳の南東斜面を600米のほぼ等高線沿いに横切り武好橋を経て雄冬岳に続いている。

この武好駅跡に到着したのが14時40分であるから、約4時間のアルバイトであった。

この武好駅跡のあるコルは左にルチショカン沢(アイヌ語で道のある沢の意味)と大別苅沢の源頭に挟まれた地点にあり、林道が大別苅沢のかなり奥まで入込んでいるのが見えた。

松浦武四郎が安政4年(1857年)7月3日、黒沢屋直右衛門を同行してこの山道を通った時の描写は、

「三日 震起頂星行一里余、ホンナイ番屋達、曉風夕暮風浪侵、暮秋節、是より新道に入、上ること七八丁。此處九折少し敷。過て樺原に到る。此辺より少し平地。少し下り、また上りしてしばし行く。此處ホンナイを左に見るにエンルイコマナイカツチ過てまた少し 敷方を上るや、しばし行て大ヘツカリ左り沢のカツチ、過て後ろを振り見れば、ルルモツへの能く見ゆ。しばし行て、凡武里半、笹小屋、この間も此小屋にて休息。其節は昼過て此處え来りしが、今度は未だ五ツ半(9時)頃着しぬ。其故はは道が能く成しが故也。下に清水一力所有。水清冷にして此頃の身 続にも渴不也。當時此小屋に三十人計居る也。出て少し坂を上りまた下だるや、右の方大ヘツカリイトコ(大別苅沢源)此處より眺望ヘツカリ沢まゝヘツカリの沢まで通して見ゆる也。向に大ヘツカリ岳見ゆる。」とある。「松浦武四郎 丁巳東西蝦夷山川地理取調」より。

この時は丁度この増毛山道を調査中で、武四郎が見分のため通過した時の記述である。ちなみに大別苅岳とは天狗岳の一部である973米のピークである。

時刻も15時を過ぎたので別苅へ下ることとした。途中でルートを間違えて苦労したが夕闇の迫る林道を道々アイヌネギ、ウド、フキ等採りながら別苅へ下だった。

私がこの山道調査に来るもう一つの楽しみをご披露しておこう。

別苅と幌の中間に岩尾と言う所に温泉があり、この温泉の湯船につかり眼下の日本海に沈む夕日を見ながら疲れをとって、札幌へ帰るのがこの山道調査のもう一つの楽しみである。

平成5年5月21日記す。

増毛山道を歩む その4

6月5日（土）、第4回目の増毛山道調査のため再び幌の渡辺氏宅を訪れた。

6月の札幌はライラックの花が咲き初夏の季節を迎える時期である。

前日の渡辺氏との電話での打合わせでは、今回は幌から浜益御殿山を越え、雄冬岳への中間でベースキャンプを張り、翌日雄冬岳を越えて武好橋の付近まで調査し引返す予定であった。

天候は、北海道の東海岸に添って発達した低気圧が通過し道東一帯に風と雨の被害をもたらしたが、日高山脈を隔てた西海岸地方は高曇りながら風も無くまあまあの登山日よりである。

第2回の調査の時に、車で登った林道のかなり先まで今回は雪が解けていたため車が使え、大阪山（533・3）の先約600Mの高さまで上がる事が出来た。

この時期この付近一帯は山菜の笹竹の子が採れるので5・6台の車が入り込んでいる。

車を降りた地点から約1K程歩いた地点で増毛山道らしい幅約1米程の笹に覆われた道が現われた。この付近から所々に残雪が現われブッシュが続く。道は大阪山の緩やかな円形の頂上から浜益御殿山に続いているのだが、歩きやすい残雪を伝って登ったため山道の在処は途中で分らなくなつた。

若い渡辺氏は近代式最新の3人用テントとキャンプ用具一式を背負つてのアルバイトだが、私は30年前の装備の違いと体力の差は如何ともしがたく、とうとうアゴを出してしまいベースキャンプ予定地のはるか手前の浜益御殿山（1038・6）の手前約1K地点でテントを張る仕儀となってしまった。午後2時である。背後が密集した笹藪で覆われ風避けが出来、正面に雄冬岳（1197・6）のピークが残雪に覆われてそびえ、千代志別の海岸へ落ちる長大な尾根が、麓は新緑に色づき中ほどは未だ萌黄色で頂上付近は残雪があり、時々ウグイスのさえずりが聞こえる誠に眺めの良い場所である。笹を刈り雪原の上に敷きテントを張る。2人で持参のウイスキーを飲みながら私にとっては約30年振りのテント生活を一夜過ごすこととなつた。

最近の登山道具を見ると極めて軽量、コンパクトで機能的である。私の山道具は片桐のキスリングに、米軍が朝鮮戦争時放出のシュラーフに背負子と今では博物館行きの山道具ばかりである。

真夜中11時頃にテントを打つ雨音とゴウゴウと鳴る風音で目を覚ました。再び眠りに落ち4時頃小鳥のさえずりで目ざめると、風雨も止みテントの小窓から覗くと雄冬岳の稜線がはっきりと見え、高曇りであるがますますの天気である。

8時20分サブザックを担いで浜益御殿山を目指し緩い岳樺の生える雪原を行き、9時23分浜益御殿山の這松に覆われたピークに到着。増毛山道はこのピークを通らず下を迂回しているらしい。このピークからは北方にこれから向かう雄冬岳（1197・6）東に

暑寒別岳（1491・4）直ぐ東に浜益岳（1257・7）の丸いドームが見える。振返ると穏やかな春の日本海に突出た愛冠（アイカップ）岬から石狩湾を隔て羊蹄山や恵庭岳まで遠望出来た。

増毛山道はここから真北に向かい、一度雄冬岳との中間、留知暑寒（ルチショカン）川の上流868米まで下り、雄冬岳の裾を右に巻き武好へつづいている、と地図にあるが深い残雪の下で今は全く見えない。浜益御殿で眺望を楽しんだあとグリセードをしながら下り、だまっ広い岳樺の茂る雪原を行く。途中多分地熱があるためであろうか地表が現われており清冷な雪解け水が流れている場所があった。雄冬岳の登りはかなり急峻な雪渓が残っており山稜の這松に掘まりながら這登った。この頂上近くにアイヌネギの群落を見付け帰りに採ることとする。留知暑寒川の源流付近のどこかでカッコウがさえずっている。

13時雄冬岳に到着、この眺望は素晴らしい。ここはほぼ増毛山道の中間部分でこの山道の大部分が一望できる。この高見から眺めると昔の人が危険な海路より多少険しいこの山道を開拓し通った理由が良く判るような気持ちになる。眼下に別荘から武好を経て天狗岳の裾をめぐり、この雄冬岳から浜益御殿を通り幌の浜まで、丁度三角形の一辺を通る近さである。この雄冬岳と天狗岳の中間の708・9米の西側の斜面付近に細く一本の道が見える。多分増毛山道の道形であらう。双眼鏡で見ると岩尾村の付近からかなり上部まで林道が切り開かれている。次回はこの岩尾の林道を辿り調査してみようと、渡辺氏と語り合いながら山頂のケルンに記念の印をして下山にかかる。

途中でアイヌネギを探りながらテントに戻ったのが15時、テントをたたみ重い荷を背負い又々ヤブコギをして夕闇の迫る幌の村へ付いたのが18時であった。

前日には気がつかなかつたが、下山の途中の山道らしい道端の藪の中にちょっと変わった石片があった。石の表面になにやら文字らしいものが書かれてあるが長年半分以上土に埋もれ、表面に苔が付いておりよく分らない。松浦武四郎の文にこの辺りに稻荷社を建てた、という記述があるあるいはその記しかもしれない。

平成5年6月9日（ご成婚の日）記す。

増毛山道を歩む その5。

強烈な低気圧の接近で海は飛沫をあげ、山はゴウゴウと鳴つている。

11月14日、浜益山岳会の渡辺氏と2人で第5回目の増毛山道調査に出掛けた。

今回の目的は、今までの調査で別荘から武好駅跡までと幌から雄冬岳の間は終えたが、この山道の中心部分である武好駅跡と雄冬岳の間約4キロの道跡調査である。

昭和22年の地理調査所5万分ノ1「雄冬」をみると、現在の国道231号の通る浜益と別荘のほぼ中間よりちょっと別荘寄りに岩老（イワオと呼ぶ）と記された漁村がある。

（注参照）現在は何故か岩尾となっているがこの岩老から増毛山道へつながる約3・5キロの山道が記されている。つまりこの山道は増毛山道の枝道である。地図上では武好駅跡と雄冬岳の中間にある武好橋で増毛山道に合流している。

（注）岩老、岩尾とも語源は定かではないが、我家に残る記録では「浜益増毛両郡境稻尾岬」とあり、又松浦武四郎の記録には「イナオサキ、此処マシケ・ハママシケ境目岬也」とある。

私が少年の頃増毛の古老から聞いた話では、ある年の秋に岩尾から増毛へ嫁ぐ花嫁が海が荒れたため海路を行くことが出来ず、この山道を通って漸く増毛へたどりついた、と言う話を聞いたことがあつたが、多分昭和の始め頃には岩尾の人々にとって生活道として充分価値のあった道であったと思われる。

また、第3回の調査の際見付けた古い電信柱は別荘から武好駅跡を通り、岩尾まで敷設されていたらしい。

道は岩尾温泉の手前から天狗岳（973）と雄冬岳（1197・6）の中間コルに向かって続いている。始めははっきりとした道跡が残っていたが次第に分らなくなり小一時間程登った300米の等高線付近で全く消えて終っている。又しても物凄いヤブ漕ぎが始まった。幸い晩秋で木の葉が落ちてしまっているため見通がよい。

渡辺氏が前日の下見の折につけてあった赤いテープを頼りに沢を一本越えると突然林道に飛出した。この林道は我々が6月に雄冬岳から望遠したときに見た林道の一部に違ひなく、我々が目指すコルまで続いていそうである。お陰でヤブ漕ぎから解放され楽なワンデーリングとはなったがこの山肌の荒れ様にはちょっと考えさせられてしまった。

林道は深山の森林を切出すためにブルトーザーで急峻な山肌に道を付けてあるため雨水が表土を流し去り、無残な山肌を晒している。

この辺一帯の海からにしんが去ってしまった一因かもしれない。

それにしても強烈な風である。ヤマセと呼ばれる山越えの風が雄冬岳を越えて岩尾の谷目掛けて一度に吹き下ろしてくる音はすさまじい響きをあげて木々を揺さぶり、強風で折られた小枝が飛んで来、一抱えもあるトド松がいたるところで倒れて林道を塞いでいる。トド松の根は意外と浅いのに驚かされた。風を避けて太いトド松の下で昼食をとっていたときも、強風で幹が揺れると地面がユッサユッサと盛上がり地震のような揺れを感じた。

林道は雄冬岳と天狗岳の中間の669米と708・5米のコブノ間を越え、増毛山道を横断して留知暑寒川の原流へ下っている様子である。

増毛山道はたしかにこの付近を通っていると思われ、それらしい道形があるが判然とはしない。諦めて戻りかけ708・9米のコブにつづいている林道開拓時に作ったと思われる小道を暫く登ってみたが判然とせず、みぞれ混じりの強風が益々強くなってきたので退却することとした。

後日渡辺氏からの連絡により、彼が翌週再びこの地を留知暑寒川の原流から林道を車で上がり、この小道を調査したとき増毛山道の道形を発見したとの連絡を受けた。あのときもうすこし奥の方まで調べれば良かった、と後悔した次第である。

いずれにしろこの地は今深い新雪に覆われており、春の雪解けを待つて再び調査を再開する予定である。

平成6年1月23日。

増毛山道を歩む その6

昨年（平成5年）春から秋にかけて5回に及ぶ増毛山道調査を行ない、11月に強風の中を岩尾から登り、708.5米のコルで引返した後、浜益山岳会の渡辺氏が再度調査した際に道形を見付けた、と前回記したが今回はその道形を確認し雄冬岳までのルートを見付けることと、翌日は反対側の武好橋のあった地点から昨年5月に別荘より登り到達した武好駅跡までの道形を辿ってみたいと思い、6月11日7:00に幌の渡辺氏宅に集合した。

実は今回の山道調査に重みを加える歴史的事実がもう一つ加わった。それはこの山道の往来がまだ盛んだった頃、明治39年6月から同40年6月にかけて、この山道沿いに15ヶ所、当時の陸軍省参謀本部測量局の手で一等水準点の選定が行われ埋石されたという記録が見付かった事である。

さらにこの15ヶ所の中でもNO8462と記された浜益御殿山頂上直下の一等水準点1037.8150米は通称牛石（ベコイシ）と呼ばれた石の脇に埋石され、この水準点は現存する道内水準点としては最高地点である、との事である。

この事実は幌の渡辺氏のご紹介で建設省国土地理院北海道測量部の前島孝夫氏及び小玉良雄氏の御両人から伺い、実際この6月5日にこの御両人がこの水準点を見付けるべく浜益御殿山に登ったが遂に発見出来ずに下山された、ということを直接聞いたのである。

水準点と言うのは、明治6年6月から12年6月までの東京湾靈岩島で計った平均海面を0米と定め、（その後大正12年の関東大地震の後その数値を改正した）土地の高さを計る際に基準とする点で、全国の主な道路に沿って約2キロメートルごとに設け、ここに花岩の水準標石を埋石したものである。

この浜益御殿山に埋石された水準点『点の記』によると

所 在 北海道石狩国浜益郡浜益村大字群別字幌 俗称雄冬峠
線 路 従北海道石狩国札幌区郡
至 全 道天塩国留萌郡留萌村ノ通路
所有者 北海道庁所轄
地 目 道路
石 質 三河国産花崗岩
点ノ種類 一等水準点
選 定 明治四十年六月三日
埋 石 明治四十年七月廿四日

班長 陸地測量師 杉山正治
検査掛 久 会 古家政茂
選定者 陸地測量手 正木照信
埋石者 久
観測者 高野良成

と、あり埋石した場所の図面が添附されている。

今度の山行では、この約90年前に埋石された水準点の一ヶ所でも見付けることが出来れば、と願っての山行調査となった。

国土地理院昭和57年10月30発行2万5千分ノ1「別苅」の留知暑寒別川の上流まで幅員1・5米未満の道が消える地点より実際は右岸斜面を天狗岳、雄冬岳を結ぶ稜線を乗越して丁度増毛山道を横断する形で立派な林道が岩尾側へ付いている。しかし岩尾側は途中で消滅している。

地図上の669米と908・9米の中間、丁度増毛山道の真上にベースキャンプを張ったことになった。この林道は誰でも入れるのでは無く、増毛山岳会の五十市氏に林道入口の鎖を開けていただき入山することができた。

一行は昨年も同行された札幌北稜クラブの五十嵐氏、浜益山岳会の渡辺、上田の両氏と私の4名である。

天気はこの上もない程上々で気温も高く、若葉がようやく芽生えた木々の向こうに暑寒別の山々が斑な残雪を残して輝いている。

しかし今回も猛烈なヤブ漕ぎとおまけにブヨの大群には随分と悩まされた。おかげで下山して一週間たった今でも刺されたかゆみに苦労している始末である。

708・5米のコルから微かに増毛山道の踏跡が続いている。ほぼ稜線沿いに続いているため間違えることは無いが、身の丈をこえるヤブの中では足下に気を取られ、つい方向を見失うことがある。尤もそのおかげで竹の子やアイヌ葱はたくさん取れた。

この付近の状況を安政4年7月松浦武四郎が伊達林右衛門のハママシケ支配人黒沢屋直右衛門を同行して通っている時の文章「丁巳(ていし)東西蝦夷山川地理取調」(解読者秋葉 実氏)によると、

『しばしそのホロベサキノホリヒラを回りて行くや、まだ此辺は笹を払い計りなるが故に道も余程暇取りぬ。此辺より人足等追々道に居たり。少し右の方の山の端を見れば五髭松一面に茂生りけり。平まゝしばし行、ヤムワッカナイ此小川もポンナイえ落つるよし。過てしばし行て、ポロブイウシナイ此沢七八間の平川。小石の間に斐多し。是もホンナイの沢え落る也。是より岸様成所十丁計行。此辺より浜の方ヲ斐イ岳有るよしなるが見不。しばし過て右の方イワヲナイトコ浜手の方に有。また大転太道しばし行て左りに笹小屋、此処まで下の小屋より凡一里と思わる。其処左りホンナイのイトコ、右は峨々たる岩

壁の間、シュルクタウシナイイトコに当るよし。是よりまた九折少し上るや、山の方平也。イワヲナイノホリと云。是此辺第一番高し。九折少し上り行や五罫松と岩菅のみなり。凡十五六丁上り此岳の東の片平え切上たり。是よりショカンヘツ岳を見るに、掌を合て立たる如き奇岩挾刀の如く並び立たる処有。実に其景色筆紙につくしがたし。』以下省略

松浦武四郎のこの文はこの増毛山道が開拓の真最中のもので、所々に作業の人足が居たり、黒沢屋直右衛門を同行させたのも切開き区間の件で浜益側と増毛側でもめごとがあり、彼が見定めのために同行したのである。

余談ながらこのもめごとは武四郎がその場で大岡裁きで解決をした、とある。またこの文に出てくる「掌を合て立たる如き奇岩挾刀の如く並び立たる処有。実に其景色筆紙につくしがたし。」とあるのは群別岳（1376・3）の遠景を見ての感想と思われる。

我々が出発した地点から雄冬岳の頂上まで距離にして約2キロ、どんな険しい道でも1時間もあれば充分の距離のはずだが、結果的には6時間もかかった。道形は所々微妙に見受けられるが971米のピークを過ぎる頃は全く分らなくなり1000米の等高線と思われる地点で午後3時を過ぎたので残念ながら雄冬岳のピークを目前にして引返すことにした。

今から26年前の昭和43年に北海道庁林務部の村上啓司氏、増毛山岳会の阿部事夫氏、五日市氏の3氏がこの山道を歩かれた記録が北海道庁林務部部報『林』第209号に載っているが、その文中に「921・25の水準点の高みにある目印となる3本のトド松云々」も見付けることが出来なかった。

帰りは雪渓をグリセードで降りたため割と速くテントに帰ることができた。

同行の上田氏は翌日の予定があるためお帰りになり、この夜の夜食は3人で満天の星の下ジンギスカンにアイヌ葱をたっぷり入れ、もぎたての竹の子の塩ゆでにマヨネーズかけて豪華なディナーで終えた。

翌12日、相変わらず天気は上々、小鳥のさえずりで目が覚める。

この日の予定は反対側の武好橋から武好駅跡までの山道調査である。

しかしこの日の調査は今までの調査の中でも最も困難な一日となった。即ちどこにも道形らしき道が無いのである。昨日までの道は稜線伝いに道がとられていたが、この先武好駅跡までは左に天狗岳（944・9）を見ながらその裾をほゞ606米の等高線沿いについている筈である。親指程もある2メートルを越える太い笹竹と、それに纏わる山ブドーのつるに悩みながら50メートル進むのに1時間もかかつた。やっと武好橋が在ったであらうと思われる地形らしい場所に来たが川らしい沢も無く水音も聞こえない。この地点には岩尾から来る道もある筈であるがそれさえも見付からない。これでは武好駅跡まではとても無理と

判断し、残念ながら引返す事とした。渡辺氏のナビゲーターぶりは見事なもので稜線を越え岩尾側へ下だと岩尾からの道形が見付かり、古い電信柱が2本立っていた。しばらく下だと林道に出1.3：30にテント場によく戻ることが出来た。

それにしてもこの増毛山道を現在辿るのは困難な事である。廃道となって約一世紀を経てしまえばこれ程の形になってしまいのか、と自然の復元力の偉大さに驚きましたが、一方この増毛山道を復元したい、との複雑な気持ちである。

もう一つ残念なのは15ヶの水準点の一つも発見出来なかった事である。道形さえも分らないのだから、と自分自身に言訳をしながら山に別れを告げた。

今回は増毛山岳会の五十市氏に色々お世話になり感謝する次第です。

以上。

1994年6月19日

伊達 東

増毛山道を歩む その7

平成6年6月11、12日と、2日に亘る武好、雄冬岳付近の増毛山道調査以後、専ら卓上の山道調査に専念していた。その成果の一つは、この増毛山道の距離の確認であり、二つ目は掛けた費用の明細が判明した事である。

先ず距離についてであるが、既に多くの記録によるとこの山道の道程はおよそ9里と記されている。例えば我家に残る『北海道伊達家履歴』では、「増毛郡ヨリ浜益ニ至ル山道十一里余ノ険路」とあり、河野常吉編『北海道道路史』にも「阿冬山道を開索、浜益より増毛に至る道程九里なり」と述べている。

しかし現存する地図上の増毛山道と言われる幌一別荘間の距離はどう計っても9里は無い。そこで9里の根拠とされる文献を調べたところ、かつては我家に保存されていて、北大図書館の北方資料室に保管されている「伊達家文書NO180」に詳しく記載されており、その区間は「ハママシケヨリマシケ 九里廿弐丁」（原文のまゝ）つまり浜益の運上家（現在の浜益村のほぼ中心地に有った）から増毛運上家（現在の増毛町）まで、と記されていた。つまり当時の距離の起点は運上家から運上家までが習慣であったと思われる。

次にこの山道開索に掛けた費用であるが、浜益村史214頁に「ハママシケボロクンベツよりマシケポンナイ浜まで延長九里半をハママシケ、マシケ両場所請負人伊達林右衛門が一、三一一両を出費し」とある。

この1311両の内訳も同じく北大図書館の北方資料室に保管されている「伊達家文書NO178及び179」に記されており、それによると、

- 1 土方棟梁作右衛門外四拾四人給料諸掛として四百四拾四両、錢九拾六文
- 2 土方棟梁善蔵外五拾人給料諸掛として四百五拾壹両三分三朱、錢弐百拾五文
- 3 山道 稼方給料 弐百四拾八両壹分一朱、但壹人前壹日金壹朱
- 4 山道陸立道中金 拾五両 但壹人前金弐分ツヽ
- 5 山道入用諸品代 百五拾弐両

以上合計1310両4分5朱と錢311文となるが、当時の貨幣換算で4分は小判1両に当たるとされているから、費用総額は1311両5朱と錢311文となる。

当時1両の金で米が1石2斗(168Kg)買えた、とされているから今の米価換算1kgで480円で計算してみると当時の1両は約80640円程度となるから、約1億5百70万円程度の費用が掛けたと想像される。

この様にみると、当時の蝦夷地場所請負人の資金力の厚さと、この山道に賭けた情熱に頭が下がる思いがするのである。

増毛山道を歩む その8

昨年6月19日に記した「増毛山道を歩む その6」に、浜益御殿山の山頂直下に明治40年6月3日に埋石された一等水準点、N O 8 4 6 2は現存する北海道内の最高地点(1037・8150米)であると記し、国土地理院の前島、小玉の両氏が6月5日に浜益御殿山に登り発見に努めたが見付からなかった、と記した。

その後我々もこの水準点探しに協力し、山行の度にこの増毛山道沿いに埋石された15ヶ所の水準点の一つでも見付からないか、と探し求めたが未だに見付らないのであった。

その後約1年が過ぎ、本年5月7日、翌週の本格調査を控え、予備調査のため渡辺千秋氏と浜益御殿山へ向かった。

今年のゴールデンウイークはあまり良い天気に恵まれなかつたが、皮肉にも最終日の7日は快晴に恵まれ、快適な山行となつた。残雪は堅く空は青く澄渡り、まだ上手に鳴けないでいる鶯のさえずりを聞きながら登つてみると、スキーとテント一式を背負つた一人の岳人に追付いた。聞くところによると神戸からこのゴールデンウイークを利用して北海道の春山スキーを楽しんでいる小池達郎君43才と言う好青年である。

彼は既に幾度となく北海道の春山を訪れ、今回は羊蹄山、ニセコ、積丹岳を滑り、積丹岳から石狩湾を隔てて見たこの雄冬山塊の白さを遠望し、ローカルバスを乗継いで訪れた、との事。今夜は浜益御殿山にテントを張り付近の山々を滑りたい、と誠に羨ましい限りである。

残雪が続いていたおかげで約2時間半で頂上に立つ事が出来た。目的の水準点の目安としていた通称牛石(ベコイシ)と呼ばれる石はまだ雪の下で見出だすことが出来なかつたが、翌週の目途は十分につけられた。

ところで、私達が山頂で静寂と眺望を楽しんでいると、はるか下界から爆音を立てて数台のスノーモビルが登ってきた。この一帯は国立公園でこの種の動力車は立入り禁止のはずなのだが。スノーモビルはたちまち山頂を駆抜けると遙か暑寒別岳の方へ走り去つて行った。山を楽しむ方法にも変化が生じてきたりしい。

もう一つ、私にとってのカルチャーショックは携帯電話の出現である。渡辺君が持参した携帯電話で山頂から札幌の我家へ試しにかけたらカミサンが出たのにはビックリした。古い山の歌に「つらい浮き世のうさを忘れ…」とあつたが、山の中まで浮き世を引摺つて來た事の反省しきり、であった。

増毛山道を歩む その9

遂に発見、幻の水準点！

念願がやっと達い、とうとう北海道最高地点の水準点を搜し当てた。

先週の予備調査から一週間後の5月14日、午前7時に幌の渡辺氏宅に集合したのはこの水準点を一年がかりで探し求めていた国土地理院の小玉、前島の両氏、三角点の会の桜井氏と小玉氏の従兄弟2人、こがね山岳会の渡辺、上田、紅一点の黒川さん、それに上田先生の教え子の浜益高校屋外研究班の生徒5名、それに私の計13名の大所帯となった。

この時期は好天続きであったため雪解けが意外に早く進み、一週間前の雪の状態ではゾンメルスキーが使えるかもしれない、一応担いでは来たものの、邪魔になり途中で投出してしまった。

天気はまあまあの状態で、これだけの人数で探せば簡単に見付るだろう、とガヤガヤ言いながら浜益御殿山に到着し、高校生の持参したジンギスカンを食べ、めいめい水準点探しを始めた。

幸い山頂付近の南側斜面は雪が無く、増毛山道の道跡が微かに残っており、目印としていた牛石（ベコイシ）も見付かった。ところがこの水準点を埋石した記録「点の記」の図面によると埋石地点は牛石から40・0米の地点に4ヶの擁石に囲まれてことになっている。この図面通りとすれば40・0米の地点は山頂を越えて反対側の千谷志別側の谷に入ることになり、これは明らかに4米の記録ミスではなかろうか、と衆議一決、4米の地点を懸命に探した。しかし約80年も経たこの一帯の地表の変化は当時と相当変わって終っているらしく、なかなか見付らない。高校生達も諦めたらしく上田先生と一足先に下山してしまった。残った者はなお諦め切れず藪と灌木の中を探し求めた。そしてついに小玉氏の従兄弟の方が擁石の一部と思われる石を見付けた。先の尖った斧で地表を剥ぎビックリと生えた根曲 笹の根を堀起こし上から突ッくとカチカチと音がする。さてわと思ひ懸命に堀下げると地表から約30センチ下に表面がスペベした石が現われた。そして水準点の特徴である“へそ”が付いている。紛れもなく一等水準点NO8462で標高1037・8150米である。思わず全員で万歳をさけんだ感激の一瞬であった。

さて、冷静に考えてみると、この水準点の価値は今までこそ利用価値の無い物に違いないが、かつて伊藤秀五郎氏が「北の山」で書かれた『北海道で一番高い所を通っていた山道の一つである増毛山道』を最も象徴する水準点であることは間違いない事実である。

私達一行はこの発見を契機として、この遺産をどのように後世に伝えるべきか、新たな課題を背負うこととなったのである。

次に、この水準点探しを報じた平成7年5月13日付と15日付の北海道新聞夕刊の記事を添附しておきます。